

## ワシントン情報、裏 Version

2004年7月9日

竹中 正治

### 「華氏 451 度と 911 度」

#### 【カンヌでのフランス観客の喝采】

話題のノンフィクション映画“Fahrenheit 9/11（華氏 911 度）”を見た。ご存知の通り、この映画はフランスのカンヌ映画祭で上映され、最高賞を受賞したものだ。これを見たフランスの観客達の反応は一言で言えば、「ほら見ろ！俺達の言った通りだったろうが！」という喝采だった聞いた。果たして米国ワシントンでのこの映画の受けはどうか？ 平日の夜だったが、私がよく行くジョージタウン K ストリートのシネコンの上映劇場は満席に近い賑わいだった。この劇場が金曜日以外の平日にこんなに混むのは、今年の「マトリックス・リローディッド」と今年の「ハリーポッター・アズカバンの囚人」以外に私は経験したことがない。Yahoo Movies の人気ランキングで見ても、封切り直後期間の全米興行記録を塗り替えて話題となっている「スパイダーマン2」に次いで 2 位につけているから凄い。制作費は間違いなく 911 の方がけた違いに安いはずだから、収益率では群を抜いている。

この映画を「ブッシュへの痛烈な一撃だ」と愉快に思うか、あるいは「ブッシュ大統領をちゃかすなんて、許せない。中傷、誹謗だ」と怒るかは、その人の政治的な見解次第である。もっともこの映画は、ブッシュ大統領をちゃかしているだけの内容ではない。戦争で子供、肉親を失ったイラク人の慟哭、戦死した米軍兵士の親の悲しみを双方なまなましく伝えている。私が一番衝撃を受けた映像は、私の息子（もうすぐ 5 歳）と同年齢ぐらいのイラクの子供達が空爆で多数死に、その遺体を運ぶイラク人男性が「なぜこの子達が殺されなくてはならないんだ！」とカメラに向けた怒りと慟哭である。私の隣の米人女性はすすり泣いていた。ベトナム戦争が米国社会にもたらした亀裂に比べれば、まだまだ浅いだろうが、対イラク戦争が米国社会に間違いなくひとつの亀裂、傷口を残し始めていると感じた。接戦の様相濃い 11 月の大統領選挙でブッシュ大統領がもし負けたら、この映画の再選阻止の貢献度が改めて話題になるかもしれない。

#### 【近未来小説・映画「華氏 451 度」のタイトルをもじった含意は？】

ところで、多少の SF ファンなら周知のことであるが、この映画のタイトル“Fahrenheit 9/11（華氏 911 度）”は、米国の SF ファンタジー作家レイブラッドベリ原作の近未来小説で映画にもなった“Fahrenheit 451（華氏 451 度）”のもじりである<sup>1</sup>。私は学生時代に原作を読み、映画も見て、よく憶えている。華氏 451 度とは紙の燃える温度で、近未来の全体主義社会を舞台にしている。こ

---

<sup>1</sup> 高齢だが存命中のレイブラッドベリ氏は、自分の原作タイトルが承諾なしに盗用されたことをひどく怒っているそうである。政治的な見解もこの映画とは全く異なるそうである。

の社会では、書物が一切禁止されており、ファイヤーマン（消防士）の仕事は、隠された書物を発見して、焼却することである。人々のニュースソースは各家庭に置かれた大型 TV スクリーンから流れてくる官製の放送番組のみである。ところが、隠れて書物を読む人々が絶えない。従ってファイヤーマン達の仕事も絶えない。ブラッドベリは反知性主義的社会の象徴として全ての書物を焼き尽くす近未来社会を描いたのだ。

映画「華氏 911 度」の製作者が敢えてレイブラッドベリの「華氏 451 度」をもじったタイトルをつけた意図は何だろうか？ 別に現在の米国が全体主義社会に向かっているとか、ブッシュ大統領が独裁者を目指しているとか、まさかそう思っているわけではなかろう。制度的な違いはあまりに鮮明だ。映画の製作者の含意は「政府による情報操作」の問題にあるのである。「華氏 451 度」の架空社会で書物が禁止されているのは、政府による情報操作、国民の意識操作に書物と書物を読むことが障害になるからである。書物を読み、思索を練る知的な懐疑と探究心が権力の情報操作のじゃまになるのである。

映画の「華氏 911 度」も、例えば「フセイン政権の大量破壊兵器保有」、「フセイン政権とアルカイダとの結びつき」など、その後証明することがほとんど不可能となった「情報」が、対イラク戦争を正当化するために意図的に喧伝されたこと、また 9・11 以前においてはブッシュ政権人脈が石油の利権も絡んでビン・ラディン一族とも関係してことの隠蔽が行われたと訴える。

### 【世論は健忘症？】

「華氏 911 度」を見て思い出したことがある。昨年 6 月、ワシントンきつての中東イスラム問題専門家のひとりである某氏とたまたま面談した時のことである。当時捜索中のイラクでの大量破壊兵器について、私が問うと、同氏は「そんなものは見つからない。存在しないからだ」と断言した。私が「存在しなかったことが明らかになれば、ブッシュ政権にとっては致命的な打撃になりますよね？」と更に問うと、「それほど深刻な打撃にはならないだろう。残念ながら、世論は健忘症（Short Memory）だからね」と答えた。

レイブラッドベリの「華氏 451 度」のラストシーンは、本を読むことの喜びに目覚めた主人公が、摘発され、都会を離れた森に逃げ込む、そこでは同様に摘発を逃れてきた人々が手にして来た本を暗唱し、失われた本を想起することに没頭している。本を丸ごと暗記した後、本は捨てるのである。そうすれば違法にはならない。私はこのラストシーンが好きではなかった。抵抗の仕方が妙に陰鬱だからだ。しかし今回ちょっと考え直した。ひょっとして、もしかしたら、ブラッドベリは「想起」することの重要性をラストシーンに含意したのかもしれないと思ったからだ。過去の教訓、過去の情報を忘却せずに想起することが、現在の情報操作に欺かれることへの知的抵抗力を生む。

ところで、「華氏 911 度」はノンフィクション・フィルムの編集で構成されている。だから画像が全て真実かということ、そう簡単ではない。フィルムは継ぎ接

ぎの編集次第で、白を黒、あるいは黒を白に見せることも可能だからだ。権力の情報操作を糾弾する同映画自体が、恣意的な映像・イメージの操作をしている可能性はある。そういう観点からこの映画を逆批判することも可能であろう。対イラク戦の支持者も反対者も見て議論する価値はある映画である。

以上